

本学学生のコンピュータ 利用経験に関する調査

太田 信宏

1. はじめに

パソコンの急速な普及と利用者の増大に伴い学校現場における情報教育の必要性は年々高まってきている。本学においても情報リテラシーおよび情報活用能力の基礎習得を目標とした情報教育をこれまで行っている。

平成6年度から中学・高等学校における情報処理教育が段階的に進められており、平成9年度からはこれらの教育を受けた学生が入学してくることになる。これまでは本学のような非情報系学科の学生の場合、高等学校までのコンピュータ利用経験はほとんど無いといってよく、従って情報処理教育も全員がゼロからのスタートで行うことができた。今後は様々なレベルの学生が一緒に入ることになり、その対応が急務となっている。

カリキュラム的には現行の科別による科目体系の見直しを行い平成9年度より全科共通の新カリキュラムに移行することが決定した。同時に授業現場においても年々変化していく学生のレベルに応じて、フレキシブルな指導や対応が要求されることになる。

このような状況のもと、学生のコンピュータ利用経験と習得レベルを把握し今後の検討材料とするために在学生に対して以下のような調査を行った。以降その調査報告である。

2. 調査の対象と内容

対象者の人数は以下の通りである。

対象者	文芸科	英語英文科	家政科	合計
96年度生(1年)	0	0	91	91
95年度生(2年)	31	44	0	75
合計	31	44	91	166名

調査は平成8年度後期に筆者の授業を選択した三学科の学生に対して、第1回授業時に行った。調査内容の概要を次に示す。

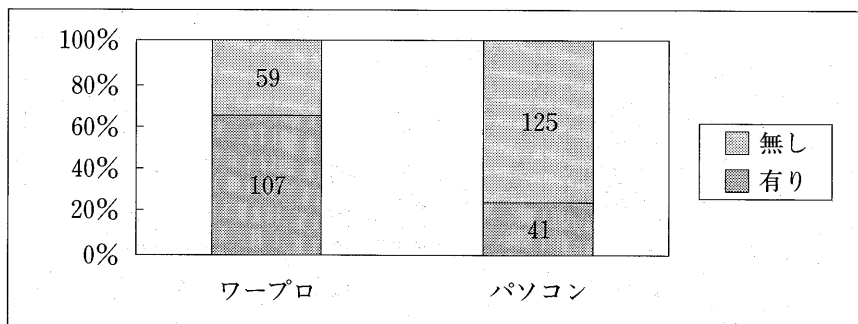
(質問項目)

1. パソコンまたはワープロを自宅に所有しているか。
2. パソコンまたはワープロの使用経験はあるか。
3. 中学・高等学校で情報処理系科目の授業はあったか。
4. 以下①～⑦についての使用経験はあるか。
 - ① ワープロ専用機
 - ② パソコンのワープロソフト
 - ③ 表計算ソフト
 - ④ データベースソフト
 - ⑤ ゲームソフト (ファミコンも含む)
 - ⑥ パソコン通信
 - ⑦ インターネット

3. 調査結果と分析

- (1) パソコンまたはワープロを自宅に所有しているか。

		ワープロ		合 計
		有り	無し	
パソコン	有り	25	16	41(24.7%)
	無し	82	43	125(75.3%)
合 計		107(64.5%)	59(35.5%)	166

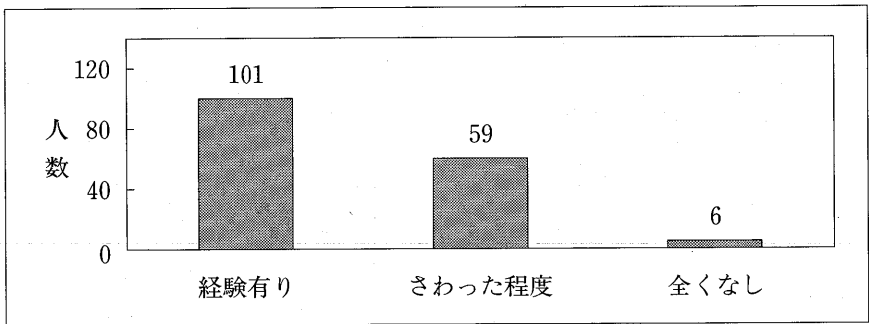


自宅におけるパソコンとワープロの所有率は、現時点ではかなり差があると言える。ワープロはおおよそ3人に2人が所有しているのに対し、パソコンは4人に1人である。これは情報機器としてはワープロがかなり早い時期から家庭に普及していたためであるが、ここ1、2年の出荷台数統計などを見るとパソコンが急速な勢いで伸びており、両者の所有率の差は年々縮まっている。

また現時点でパソコン又はワープロのどちらも所有していないという学生が約4分の1いるが、当然この数も減少傾向にある。一家に1台あるいは1人1台の時代は確実に近づいており、学校現場でもそれに見合った対応を考えていかなければならない。

(2) パソコンまたはワープロの使用経験はあるか。

	経験がある	さわったことがある程度	全く経験がない	合計
1年	53	33	5	91
2年	48	26	1	75
合計	101(60.8%)	59(35.5%)	6(3.6%)	166

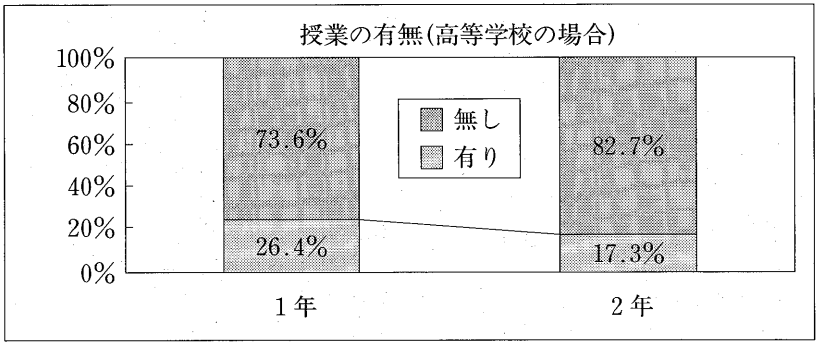


パソコン、ワープロの使用経験については約6割の学生が何らかの形で利用をした経験を持っており、逆に全くさわったことのない学生はわずか3.6%であった。たとえ個人で所有していなくても学校あるいは他の場所等で使用する機会は多くなっているといえよう。

なお今回の調査対象者中44名は英語英文科の2年生であり、このうち33名は1年次の情報処理演習を履修している。その数は経験者数の中に含まれているので、表中の人数が本学入学以前のコンピュータ経験者の実数ではないことを付け加えておく。

(3) 中学・高等学校で情報処理系科目の授業を行っていたか。

	中学校		高等学校	
	授業有り	授業無し	授業有り	授業無し
1年	20	71	24(26.4%)	67(73.6%)
2年	14	61	13(17.3%)	62(82.7%)
合計	34	132	37	129

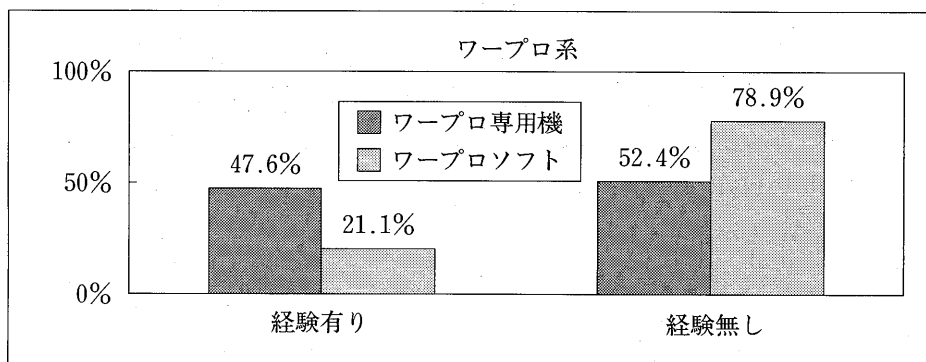


中学校、高等学校における情報処理系科目の授業実施の有無については学年別に集計を行った。中学校の状況は4～5年前のやや古いデータとなるため高等学校の数字と比較したところ「授業有り」と回答した割合が1年生26.4%で2年生の17.3%よりも高くなっている。これは高等学校での情報処理教育が段階的に進んでいることを示すものであり、今後この数字がさらに上昇していくと考えられる。

(4) 各種ソフトウェアの使用経験

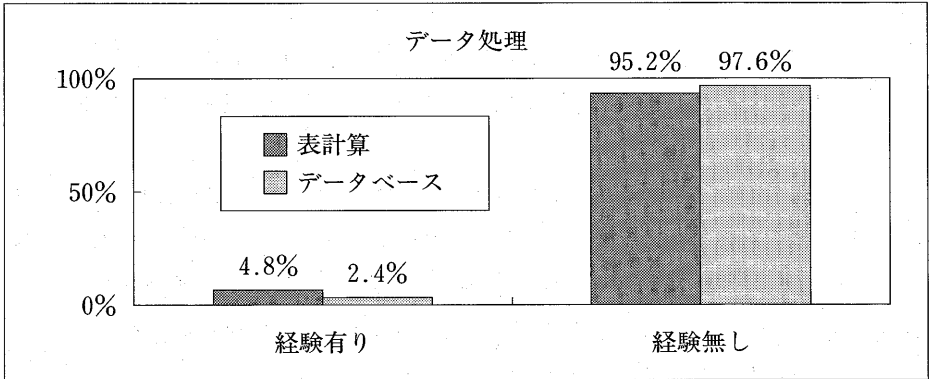
7種類のソフトウェアについて、その使用経験を4段階のレベルに分けて質問した結果が次の表である。さらにこの4段階を二分し「かなり使える」と「最低限使える」を「経験有り」とし、「さわった程度」と「全く経験無し」を「経験無し」としてグラフ化してみた。

	かなり使える		最低限使える		さわった程度		全く経験無し	
ワープロ専用機	24	14.5%	55	33.1%	53	31.9%	34	20.5%
ワープロソフト	9	5.4%	26	15.7%	53	31.9%	78	47.0%
表計算ソフト	4	2.4%	4	2.4%	17	10.2%	141	84.9%
データベース	1	0.6%	3	1.8%	10	6.0%	152	91.6%
ゲーム	69	41.6%	52	31.3%	19	11.4%	26	15.7%
パソコン通信	1	0.6%	1	0.6%	6	3.6%	158	95.2%
インターネット	0	0.0%	2	1.2%	12	7.2%	152	91.6%

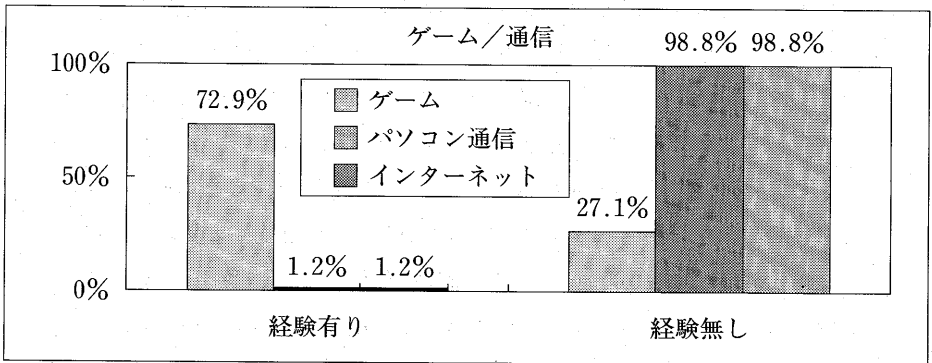


ワープロについては家庭での普及率が高いこともあり、半数近い学生がワープロ専用機の経験があると回答している。これに対しワープロソフトの利用については2割程度と以外に低く、パソコンの所有率(24.7%)をやや下回っている。これはパソコンは持っているがワープロとしては利用していないケース、あるいはパソコンは家族のもので自分自身

では使用していないなどのケースが考えられる。



表計算ソフトやデータベースについてはほとんどの学生が経験無しと回答している。「私情協」が実施した高等学校調査によると表計算ソフトなどは徐々に授業に組み込まれてきているが、学生自身はあまり「使える」という感覚を持っていないようである。ビジネスソフトとしてはメジャーな分野でもあり、本学において情報教育を行う上での重点科目として捉えていく必要がある。



ゲームに関してはパソコンに限らずファミコンゲームなどの経験も含めて回答して良いとしたため7割を越える数字となった。男女や年齢を

問わず楽しめるものも数多くあり、経験者が多いのも妥当な結果といえる。

対照的なのは最後のパソコン通信とインターネットである。ある程度予想されたものの経験者が約1%しかいないというのが現実の数字である。

両者のうち、パソコン通信の方は利用範囲の点でやや閉鎖的という側面があるものの、よりオープンなインターネットにしても家庭で自由に使える環境からは程遠いというのが現状である。これは学生側(家庭側)の問題というよりはむしろ接続時の設定の手間、利用料金、回線スピードといった主としてインフラ面による原因が大きいといえる。

これらの諸問題が整備され、家庭で簡単にインターネットが使えるようになるにはまだしばらく時間を要するであろう。したがってこの通信/ネットワークという領域を学校現場で教育することの意義は非常に大きいといえる。

4. おわりに

平成9年度以降、高等学校で情報処理教育を受けた学生が入学してくる。それらの学生が実際にどの程度のレベルまでを習得済みであるかは現時点で未知数である。入学後のできるだけ早い段階で追跡調査を行い、授業現場において必要な対応を考えていかなければならない。

今回の調査は今後の動向を予測し、種々の参考資料を得るための予備的調査である。新年度生の能力やレベルが今年度の在學生と比較して同一ではないとしても、今回の調査で今後には有益と思われる何点かの結果が得られた。非常におおまかなまとめ方をすると以下ようになる。

- (1) ワープロについては半数近い学生が一通りの使い方を知っていると考えてよい。
- (2) 表計算やデータベースといったデータ処理分野については(たと

え高等学校で学習していたとしても) 十分理解できていない学生が相当数いる。

- (3) パソコン通信やインターネットの経験者は現時点では非常に少なく、一般家庭における利用環境も十分整備されてはいない。

今回の結果で新年度の授業内容やレベルという点に対しある程度の目安をつけることができた。次に行うべきことは新入生のコンピュータ経験に関する知識とレベルを正確に把握することである。そしてそれらをタイムリーに授業に反映させることがより重要となる。

新年度の早い段階で学生の情報処理教育に対する実態を再度調査し、今後の授業および学生指導に役立てていきたい。